

現代日本語に欠落している字順の逆転する二字漢語「BA」の出自について —辞典の初出用例の問題を中心に—

(『言語の研究』5号)
2019年7月

馬 雲

1. はじめに

現代中国語には「気力—力気」・「運営—営運」など、「AB—BA」のように字順の逆転する二字漢語の組み合わせがある。しかし、現代中国語の「力気」・「営運」は、現代日本語の辞書には見出し語として見当たらず、現代日本語の辞書には「気力」・「運営」しか見出し語として収録されていないという例がある。

本稿では、このような二字漢語のうち、現代中国語の辞典《現代漢語詞典 第6版》⁽¹⁾(以下、《現代》)の見出し語として「AB—BA」の字順逆転の組み合わせがあるが、現代日本語の辞書『岩波国語辞典 第七版』⁽²⁾(以下、『岩波』)の見出し語としては立項されていない「BA」を検討の対象とし、現代中国語の漢字語彙で「BA」に相当する語が古代日本語の文献上で使用されていたかどうかについて『日国国語大辞典 第二版』⁽³⁾(以下、『日国』)で確認し、『日国』に立項があれば、その漢字語彙が現代日本語で使用されなくなった原因について検討することを目的とする。また、『日国』に立項されていない語が現代日本語において、いわゆる新漢語として使用されている可能性についての検討も試みる。

2. 調査方法

現代中国語に語彙としてある字順の逆転する「AB—BA」の二字漢語の組み合わせのうち、《現代》には「AB—BA」がともに見出し語としてあるが、『岩波』の見出し語として立項されていない「BA」を調査する。『岩波』の見出し語として立項されていない「BA」が、日本語において漢字語彙として使用されたことがあるかどうかについて、通時的な観点から用例および出典を確認するために、『日国』を用いる。『日国』は古代語から現代語に至るまでの語彙が様々な文献から集められ、用例には、単に書名や作品名が示されているだけでなく、文献の年代も入っており、意味や用法の変遷まで記述されている。『日国』には明治初期に現れたいわゆる新漢語も扱っているので、調査対象とすることにした。

また、『岩波』の見出し語として立項されていない「BA」の現代日本語における使用の実例の有無を確認するために、「書き言葉均衡コーパス 中納言」⁽⁴⁾(以下、BCCWJ)を利用し、調査を行う。

3. 調査結果

《現代》において「AB—BA」の両方の立項があるが、『岩波』では「AB」のみ立項されており、「BA」が立項されていない語は375語であった。【表1】に示すように、現代日本語の辞書には記載されていないが、『日国』に記載されている例が182語ある。そのうちBCCWJで検索されたのは62語であり、BCCWJで検索されなかった語は120語であった。また、『岩波』と『日国』の双方に見出し語として立項されていない語は375語のうち193語であった。193語のうち、BCCWJで検索された用例は11語であった。

【表1 『岩波』に立項されていない語の検索結果】

『岩波』に立項されていない語	立項あり 『日国』	BCCWJあり	62	182 (このうち46語は明治以降)	375
		BCCWJなし	120		
	立項なし 『日国』	BCCWJあり	11	193	
		BCCWJなし	182		

4. 『日国』の見出し語として立項がある「BA」

4.1. 『日国』での初出例

『岩波』の見出し語として立項されておらず、かつ、『日国』での見出し語として立項されている語は【表1】の62語と120語とを合わせて182語ある。これらの語は、古代日本語において漢字語彙として使用されていたことがわかる。

これらの語の日本の文献による用例や出典を確認してみると、【表2】に示すように、明治時代以降の文献に典拠している語は、182語のうち46語であった。

【表2 『日国』での日本の出典が明治時代以降の文献である語の一覧】

用例	初出 (作者・年代)	用例	初出 (作者・年代)
界限	『万国公法』(西周訳・1868)	愛恋	『花柳春話』(織田純一郎訳・1878-79)
査検	『布令字弁』(知足蹄原子・1868-72)	匿藏	『経国美談』(矢野龍溪・1883-84)
介紹	『漢語字類』(庄原謙吉・1869)	產生	『生物学語彙』(岩川友太郎・1884)
領受	『夢醒真論』(貞方良助・1869)	行徑	『将来之日本』(徳富蘇峰・1886)
淵深	『西国立志編』(中村正直訳・1870-71)	油桐	『改正増補和英語林集成』(1886)
耗損	『西国立志編』(中村正直訳・1870-71)	万千	『戦後の文学』(内田魯庵・1895)

担負	『西国立志編』（中村正直訳・1870-71）	喜欲	『月曜講演』（内村鑑三・1898）
憐愛	『西国立志編』（中村正直訳・1870-71）	響音	『日本の下層社会』（横山源之助・1899）
積蓄	『西国立志編』（中村正直訳・1870-71）	調諧	『禅思録』（網島梁川・1904）
用費	『新聞雑誌』（1871）	家養	『家畜』（島崎藤村・1906）
露白	『新聞雑誌』（1871）	肉皮	『岡本の手帳』（国木独歩・1906）
順随	『明治六年暴動一件報告』（1873）	譜曲	『閑耳目』（渋谷玄耳・1908）
画字	『明六雑誌』（1874）	地極	『キタ・セクスアリス』（森鷗外・1909）
安保	『明六雑誌』（1874）	糖果	『英和商業新辞彙』（田中・中川・伊丹・1904）
健壯	『広益熟字典』（湯浅忠良・1874）	直率	『東京朝日新聞』（1905）
吞併	『百一新論』（西周・1874）	日来	『虞美人草』（夏目漱石・1907）
撫愛	『明六雑誌』（1875）	同伴	『行人』（夏目漱石・1912-13）
事主	『音訓新聞字引』（萩原乙彦・1876）	上身	『招魂祭一景』（川端康成・1921）
房子	『音訓新聞字引』（萩原乙彦・1876）	伝流	『竹沢先生と云ふ人』（長与善郎・1924-25）
開展	『米欧回覧実記』（久米邦武・1877）	品名	『女工哀史』（細井和喜蔵・1925）
河運	『米欧回覧実記』（久米邦武・1877）	潮紅	『若き日』（広津和郎・1943）
河山	『米欧回覧実記』（久米邦武・1877）	石化	『第二の青春』（荒正人・1946）
頂頭	『米欧回覧実記』（久米邦武・1877）	動感	『鉄斎』（小林秀雄・1948-57）

以上の46語の初出は、『西国立志編』と『万国公法』、『花柳春話』のような訳書や、『広益熟字典』、『英和商業新辞彙』のような日本の近代の辞典類によるものが多いことがわかる。これらの明治時代の辞書や訳語に見られた語が、現代日本語では使われなくなっているようである。その理由の一つとして考えられるのは、「担負・河山・紹介・用費」には、ほぼ同じ意味を表す語として「負担・山河・紹介・費用」もあり、翻訳が盛んに行われた明治時代に、「AB—BA」間に揺れが発生し、一時的に両方とも使用された時期はあるが、その後一方の語形に固定され、現代日本語として使われ続けているものと考えられる。

用例の初出が明治以前であるが、新しい意味として使われるようになった用例が明治時代に現れているものも少なくない。具体的な例を『日国』に依拠して挙げると以下のとおりである。

「骨頭」は「関節の骨。骨のふしぶし」という意味では、『日国』では近世以前の出典として『謡曲・歌占』（1432頃）が挙げられているが、「物事に屈しない強い心。気骨」という意味では明治時代の『日本の下層社会』（1899）が示されている。

「短長」は「短いことと長いこと。短い物と長い物」という意味で使用されている出典として『経国集』（827）が示されているが、「短所と長所。劣っていることと優れていること」という意味では『米欧回覧実記』（1877）の「理上の工夫と、実験の鍛錬は、学問上においても自ら人に短長あり」が用例として挙げられている。

「式様」は「一定の形式。決まったやり方」という意味では近世以前の『六物図抄』（1508）が出典として示され、「一定のかたちや構造」という意味では明治時代の『米欧回覧実記』（1877）が用例の出典として明記されている。

「生人」は「住民、国民、住人」という意味での出典として『性霊集』(835)が挙げられ、「その道に入って、まだ未熟な人」という意味では『兩足院本山谷抄』(1500頃)が示され、「生きている人。人間」という意味では中村正直が訳した『西国立志編』(1970-71)にある「節儉を以て、生人と做て看るときは、節儉は予じめ備ふる思慮の女子と名づくべく」が用例として示されている。

「転運」は「運航してやまないこと」という意味では『俳諧・也哉抄』(1774)が示されているが、「貨物を運ぶこと」という意味の出典として『米欧回覧実記』(1877)が挙げられている。

「等同」は元々仏教用語であり、「等しく同じであること」を表し、初出として『即身成仏義』(823-824頃)が挙げられているが、“Equality”の訳語として「数学で、値が等しいこと」という意味では『数学二用得キル辞ノ英和対訳辞書』(藤沢利喜太郎・1889)に典拠している。

「年暦」は「長年の来歴・経歴」という意味では『本朝文粹』(1060)が示されているが、「年々の歴史を記載したもの。年代記」という意味では『西国立志編』(1870-71)にある「又道中記、年暦及び廉価の書の図画を」という用例が挙げられている。

「量度」は「物をはかること」という意味では『十善法語』(1775)が挙げられているが、「はかりと物差し。転じて、人の性質や心構え」という意味では『開化評林』(1875)が出典として明記されている。

以上の用例から、明治時代の翻訳などにより、既存の言葉に新しい意味を加え、使用されるようになった語が多いことがわかる。

4. 2. BCCWJで検索された語

『日国』に立項されている語が現代日本語として実際に使用されているかどうかを確認するために、BCCWJで調査を行った。『日国』の見出し語として立項されている182語をBCCWJで検索したところ、検索されたものは以下の62語である。五十音図順に示した(以下、同じ)。

愛恋 威権 画図 煙雲 歌頌 家道 願心 官長 響音 居家 銀白 減縮 幻夢 工人
皇天 豪富 語言 互相 骨頭 菜蔬 差誤 產生 直率 示指 辭謝 事主 質地 蛇毒
上馬 神女 正方 積蓄 石柱 石化 泉源 草葉 孫子 短長 単伝 潮紅 弟兄 伝流
導引 糖果 動感 頭人 日来 肉果 年紀 発出 末年 品名 府城 問訊 滅絶 揺動
来生 羅網 流風 量器 領受 侶伴

上記の語は、『岩波』の見出し語として立項されていないが、BCCWJでは用例が確認できることから、現代日本語の語彙として使用されていることがわかる。62語のうち、BCCWJでの検索数が10件以下の語は35例(下線が引いている語)あり、検索数が10件以上の語は27例あった。検索数が10件以下の語に関しては、現代日本語としてほとんど使われておらず、現代日本語の辞典にも見出し語として記載されていないことから、現代日本語での語彙としては消滅していく傾向にあると考えられる。また、「願心」のような仏教用語や、「互相」のような中国語を直訳した語

などがある。BCCWJでの具体例を挙げると以下のとおりである（当該語に下線を付した。以下同じ）。当該例の引用にあたっては、参考として著者、典書名の後に出版年を付した。

- (1) 銀青春のドラマに背中むけている顔にもわかき脂うきいつ「愛恋」と「生死」「わかもの」さわやかなことば炎え立つ真夏芝にて期して待つ。

『増補現代短歌全集』(2002) 村木道彦 筑摩書房

- (2) これほど凄愴な、しかし莊嚴さわる愛恋の姿はなく、まして歌にした者は、秀雄をおいて無い。

『養生のお手本』(2005) 出久根達郎 清流出版

- (3) 創造の嵐の中で、愛恋の焰と成功への空しい努力に身を焼いている間に、しきりと忠告と教訓を送ってくる父親の手紙の中にしだいに脅迫と強制と無理解が募ってくる。

『モーツァルト』(1990) 吉田秀和 講談社

- (4) この塔こそ、まさにあらゆる香華や瓔珞や繪蓋や幢幡、あるいは妓楽や歌頌をもって供養し、恭敬し、尊重し、讚歎すべきものである。

『道元』(1994) 道元(著)・鏡島元隆(訳) 講談社

- (5) 敵味方の呐喊の叫びと銃声が、一つの響音となってどろきわたり、たちまち、乱戦となった。

『真田太平記』(1985) 池波正太郎 朝日新聞社

- (6) この本事譚を『秘抄』はこのように詠ずるのです。この星宿光の願心が昂揚されて、法華経では焼身供養になったのだと思われます。

『わたしの法華経』(2001) 松原泰道 弘文堂

- (7) 留学生達は、授業のほかに、日本語科の学生と「互相（お互いに教えあうこと）」をして中国語を勉強するが、ある程度喋れるようになると、日本語を喋れない学生と会話をしたくなる。

『さよならストリッパー[ニーハオ]チャイナ!』(2001) 一条さゆり 竹内書店新社

- (8) 「月ごろ、風病重きに耐かねて、極熱の草葉を服して、いと臭きによりなんえ対面たまはらぬ」などと漢語を連ねるような女からは、男たちは足早に逃げさってしまうのである。

『日本語は進化する』(2002) 加賀野井秀一 日本放送出版協会

BCCWJでは、「愛恋」は(1)(2)(3)の3例が検索された。この3例によると、「愛恋」は「恋愛」と同じ意味として使われていることがわかる。『日国』で確認したところ、『花柳春話』(1878-79)、『当世文学の潮模様』(1890)が「愛恋」の用例として挙げられており、「愛恋」は明治期では「恋愛」と併用されていたと考えられる。「歌頌」と「響音」は、それぞれ1例が検索された。「歌頌」は翻訳書の用例であることが(4)から確認できる。「願心」の用例は10例あったが、10例とも(6)のように仏教用語として使われている。「互相」は1例のみが検索されたが、

これは(7)のように中国語の直訳であり、日本語の語彙としての使用ではないことが確認できる。「草葉」は(8)の1例のみ検索されたが、日本の古典文からの引用例である。また、「草葉」は「葉草」と同じ意味で使用されている。

4. 3. BCCWJで検索されなかった語

『日国』のみに見出し語があって、『岩波』の見出し語になく、かつ、BCCWJで確認ができなかった語は以下の120語である。

安保	依帰	為人	雲彩	衛護	役使	淵深	界限	会集	介紹	開展	河運	河山	画字
家書	加倍	家養	幹才	玩賞	顔容	義演	喜歡	気血	機心	穹蒼	教正	行善	歎歎
経閉	下地	健壯	巧技	行徑	康健	壕塹	耗損	魂靈	罪犯	査検	査考	算計	疵瑕
式様	嗣後	詩律	師法	積累	脂油	酬報	手鼓	酒葉	順隨	賞鑑	傷感	証実	上身
承伝	衝要	心虚	身後	身分	酔心	星火	性気	生人	生発	生平	生養	接連	争戦
蔵埋	族親	担負	地基	地極	畜牧	注脚	調諧	腸断	頂頭	転運	等同	鬧熱	匿蔵
吞併	肉皮	日前	乳母	年光	年曆	馬鞍	朴素	髮毛	万千	比対	敏銳	撫愛	譜曲
譜系	房子	法書	朴質	暮歲	本原	名学	綿連	油桐	要緊	葉子	用費	量度	隣近
林叢	列隊	憐愛	踉蹌	勞煩	路道	露白	話說						

上記の120語は、古代日本語として使用されていたが、BCCWJでは検索されなかったことから、現代日本語の語彙としては使用されておらず、廢語になっていることがわかる。これらの語の用例や出典を『日国』で確認したところ、日本の文献によるものは明治時代の初出例が最も多く、辞典類によるものも多いことがわかった。例を挙げると、「界限」は西周が訳した『万国公法]、「開展」と「頂頭」は『米欧回覧日記]、「露白」は『新聞雑誌]、「介紹」は『漢語字類]、「油桐」は『改正増補和英語林集成]、「撫愛」は『明六雑誌]、「担負」は『西国立志編]、「健壯]、「身分」は『広益熟字典]が出典である。また、『日国』では、「康健]、「壕塹]、「魂靈]、「罪犯]、「査検]、「査考]、「綿連]、「路道]、「憐愛]、「朴質]、「賞鑑]、「族親」などの語義説明ではいずれもその相反する語が記載されている。その意味を確認してみると、逆転しても両語間に意味の違いが生じないことから、現在は一方が使われ、もう一方は使用されなくなったことがわかる。また、「酒葉」と「房子」の意味はそれぞれ「中国の醸造酒に用いるもので日本酒の種麴や酒母にあたるもの。米の粗粉末とふすまに水を混ぜて種々の発酵菌を繁殖させて乾燥したもの。チュウヤオ。」、「子」は漢語の助字。家。住居。」と記載されており、中国語のみで使用され、日本語には流入していなかったことが分かる。

「安保」の意味として『日国』では「安全を保つこと」と「日米安全保障条約の略」と二つの意味が記述されている。本研究では略語を調査対象としないが、「安全を保つこと」という意味もあるので、「安保」を一つの漢語として認める。しかし、「安保」の用例については、1206例が検索されたが、(9)のように、「日米安保条約]、「安保理事会」など当時の政治情勢を反映する

時事的な用語の略語として使われていることから、BCCWJから「安全を保つ」という意味としての「安保」は検索されなかったことになる。

- (9) 北大西洋条件機構には共同防衛軍が創設され、またアジアでは、日米安保条約等が締結された。

『経済白書』で読む奇跡の50年』(1995) 志築学 日本実業出版社

5. 『日国』の見出し語として立項されていない「BA」

5.1. BCCWJで検索された語

『岩波』だけでなく、『日国』にも立項されていない語が【表1】の11語と182語とを合わせて、193例ある。これらの語は古代日本語の語彙としても使用されていなかった可能性がある。

『岩波』と『日国』の見出し語として立項されていないが、BCCWJでは用例が確認できたものは以下の11語である。BCCWJでの検索例を併せて以下に示す。

諱忌 期中 限時 国故 告密 珠宝 調協 徴象 評書 風暴 油灯

- (10) 一方、駿河の福慈岳、つまり富士山の福慈神は諱忌を嚴重に奉仕し、祖神尊をお断わりしたものの、祭の重要性をあますことなく後世に伝えている。

『古代筑波の謎』(2001) 矢作幸雄 学生社

- (11) 社長や部門長により、期中あるいは期末に、方針の実施状況、目標の達成状況などについて診断が実施される。

『品質管理入門』(2005) 鐵健司 日本規格協会

- (12) また、支配関係にある株式会社間(総株主の議決権の九割以上を保有)で組織再編を行う場合に、被支配会社の株主総会の決議が不要になるほか、剰余金の分配が期中いつでも可能になるなど、経営の自由度が高まります。

- (13) 1日から施行されることになるが(二十年三月三十一日までの限時法)、新合併特例法では、合併特例債は廃止される。

『地方自治法概説』(2004) 宇賀克也 有斐閣

- (14) また、公立学校の入学や公務員の採用、公共事業契約の締結などの際に少数民族を優先するというアファーマティブ・アクションは、性質上、実質的平等が達成されるまでという限時的なものであり、最終目標が主流社会への同化にあるという点で、移民や主流社会との統合を望む少数民族には適しているとしても、先住民族が民族固有の権利の確立と主流社会からの自立を目指すときには必ずしもそぐわない面がある。

『文化人類学研究』(2005) 常本照樹 放送大学教育振興会

- (15) およそある国家・民族の精神・文化そういうものを引括めて「国故」といいます。今アメリカにいる胡適が中国哲学史を書いて、国学ということを論じて、国学とは「国故」学のことである。

『この国を思う』(1996) 安岡正篤 明德出版社

- (16) 劉宝全は当時最も有名な鼓書芸人で、評書の双厚坪、京劇の譚鑫培と共に「芸壇三絶」と呼ばれた。

蕭乾(著)・丸山昇・平石淑子(訳)『地図を持たない旅人』(1992) 花伝社

- (17) その恐怖政治についていえば、垂拱二年(六百八十六)からはじめられた「告密の門」と呼ばれる密告奨励制度がある。

『新十八史略』(1997) 立間祥介 河出書房新社

- (18) 革命の名のもとに、人々はさまざまな私怨を晴らした。「一月風暴」をきっかけに、走資派に対する暴行はいよいよ激しくなった。

『ワイルド・スワン ユン・チアン』(1993) 張戎(著)・土屋京子(訳) 講談社

- (19) 最初の約束にては、皆対等なりしに、示す所の徴象に依れば、天下の絶対君主たらんとするが如くなるは如何、速に城を破壊せずば、冬過ぎて之を破壊すべしと。

『武士行動の美学』(1994) 小澤富夫 玉川大学出版部

- (20) よく見ると油灯の灯りが届かないほど離れた暗がりの向こう側に、微かであるが明るくなっている場所があった。

『夢の宮』(2001) 今野緒雪 集英社

- (21) 我らの一族の中でも、評判の美少女だったので。あれほどの珠寶は二度と授かるまいと言っている者もいます。

『黄金の呪縛師』(1997) ひかわ玲子 小学館

- (22) また地元関係者の意見を集約するために、商調協に類似の構成員による、「商業振興・街づくり委員会」等の名称の組織が作られている。

『流通現代史』(1993) 日本経済新聞社

「諱忌」は用例(10)の1例のみが検索された。「期中」は40例が検索され、(11)のように「定められた期間の間」という意味と、(12)のように「期間の中間」という意味で使用されている。「限時」は7例が検索されたが、(13)のように「限時法」(6例)と(14)のように「限時的」(1例)の意味で使用されている。「国故」は5例が検索されたが、5例とも(15)のように同一作者の同一著書にある例であり、中国語の「国故」を説明している用例として使用されていることから、日本語の語彙ではないことがわかる。

これと同じような用例としては、「評書・告密・風暴」があり、それぞれの用例として(16)(17)(18)がある。「徴象」は(19)の1例が検索された。「油灯」は8例が検索され、(20)から「(植物油でともす)ランプ」という意味で使用されていることがわかる。「珠寶」は(21)の1例が検索され、比喩の意味として「きれいな、貴重な」という意味で使用されている。「調協」は8

例検索されたが、(22) のように「商調協」で使用されている。

以上のことから、BCCWJで検索された11語のうち、中国語の直訳として使用されているのは「国故・評書・告密・風暴」の4語であり、「限時・調協」の2語は単独では使われず、他の語と結合または省略語として「限時法・商調協」のように使用されている。「諱忌・珠宝・徵象」の3語は1例ずつ検索され、検索数が極めて少ないことから、使用においては今後消滅していく可能性が高いと思われる。「油灯」と「期中」の検索数が比較的多くみられ、また、『日国』に立項されていないことから、新語として使用され始めた可能性があると考えられる。

5.2. BCCWJで検索されなかった語

『岩波』、『日国』の両方に見出し語として立項がなく、BCCWJでも確認ができなかった語は次の182語である。

圧気	圧強	意会	意願	易容	營運	営私	英石	影射	焰火	援救	演講	延遲	園田
尾追	外号	開打	害病	隔間	額定	較比	閣樓	家私	家当	可不	駕凌	官宦	関機
滑潤	眼白	管保	帰回	機時	機電	急救	去除	議和	金黄	金奖	具文	径直	形変
下脚	訣要	限期	嚴謹	言重	言伝	号称	合適	盒飯	告警	晤面	故世	護養	在內
采風	彩迷	作偽	竄改	贊礼	識相	子金	士紳	始創	兇男	実誠	質対	質変	士兵
写手	酬応	収回	集群	出外	順耳	商行	情敵	証物	上路	子粒	伸延	心寒	心細
心重	心焦	水汽	通融	整修	勢態	成天	節礼	装仮	層高	装扮	相面	束装	測探
率真	損毀	題解	替代	台灯	達到	湍急	斷壘	地産	調情	頂尖	調転	沈浮	通共
提前	天青	点評	答应	堂会	道行	導響	禱祝	頭先	頭前	頭年	動能	読音	土黄
難受	日元	入侵	如一	人犯	年成	年青	能効	播撒	閥門	破読	半大	攀登	伴同
備戰	筆試	筆潤	皮包	覆被	病疫	物事	文戲	分成	文本	兵工	剖解	報警	報捷
貌相	牧放	明天	面对	蒙童	盲文	訳音	薬丸	葉膏	葉農	油香	要不	来帰	楽和
攪総	力気	力主	力畜	理合	流気	領頭	量变	量力	力臂	歷經	歴来	和緩	話白

以上の182語は古代日本語としても使用されていなかった可能性が高く、また、現代日本語としても使用されていないことがわかる。これらの語はもともと中国語から日本語に流入しておらず、翻訳が盛んにおこなわれた明治時代にも翻訳語として取り入れられていないことが、日本語に欠落している原因の一つとして考えられる。「地産」は135例検索されたが、以下の用例のように一つの漢語として使う用例では少なく、「地産地消」の略語として使用されている。

(23) 立ち寄った足柄S A、目に入ったのは「富士山カレー」地産にこだわったメニューのようですが、普通のカレーでした。

Yahoo! ブログ (2008)

(24) 重点事業としては、中小企業活性化、認定農業者の支援、地産地消の促進などに取り

組みます。

「広報とりで」茨城県取手市（2008）

6. まとめ

本稿では、現代中国語の辞典《現代》の見出し語として立項されている「AB—BA」のうち、現代日本語の辞書『岩波』の見出し語として立項されていない「BA」を375語抽出し、調査を行った。

その結果、『日国』の見出し語として立項されている語は182例であり、その初出を確認したところ、46語の初出の時期は明治時代以降になっており、『西国立志編』と『万国公法』、『花柳春話』のような訳書や、『広益熟字典』、『英和商業新辞彙』のような辞典類によるものが多いことが明らかになった。これらの明治時代の辞書や訳語に見られた語が、現代日本語では使われなくなり、廃語となったものと考えられる。その理由の一つとして考えられるのは、「担負・河山・紹介・用費」のように、同じ意味を表す語として「負担・山河・紹介・費用」もあり、翻訳が盛んに行われた明治時代、揺れが発生し、一時的に両方とも使用されたが、その後一方の語形に固定され、現代に至った。

『日国』の見出し語として立項されていない語は193例であり、古代日本語としても使用されていなかった可能性が高いと思われる。193語中、11語がBCCWJで検索されたが、中国語の直訳として使用されているのは「国故・評書・告密・風暴」の4語であり、「限時・調協」の2語は単独では使われず、他の語と結合して「限時法・商調協」のように使用されている。「諱忌・珠寶・徴象」の3語は1例ずつ検索され、検索数が極めて少ないことから、消滅していく可能性が高いと思われる。「油灯」と「期中」の検索数が比較的が多く、『日国』に立項されていないことから、新語として使用され始めた可能性があると考えられる。BCCWJで検索されなかった182語は、現代日本語としても使用されていない可能性が高いと思われる。

【注】

- (1) 中国社会科学語言研究所詞典編輯室編（2012）《現代漢語詞典 第6版》、商務印書館
- (2) 西尾実・岩淵悦太郎・他（2011）『岩波国語辞典 第七版』、岩波書店
- (3) 久保田淳・谷脇理史・他編（2006）『日本国語大辞典第二版』、小学館
- (4) <https://chunagon.ninjal.ac.jp> BCCWJは、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスであり、書籍全般・雑誌全般・新聞・白書・ネット掲示板・ブログ、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億語以上のデータが格納されている。

【参考文献】

- 荒川清秀（2000）『「健康」の語源をめぐって』『文学・語学』第166号、pp.72-82
佐藤享（1976）「近世の漢語についての一考察—「療治」「治療」をめぐって—」『国語学』106、

pp.1-13

猿田知之（2000）「和漢比較漢語攷—反転語をめぐって—」いわき明星大学人文学具研究紀要、十三号、pp.14-26

鈴木修次（1978）『漢語と日本人』みすず書房

鈴木丹士郎（1981）「『抵抗』と『抗抵』」『国語語彙史の研究2』和泉書院、pp.237-254

陳力衛（2001）『和製漢語の形成とその展開』汲古書院

飛田良文（1973）「現代漢語の源流」『言語生活』四月号、筑摩書房、pp.70-79

吉川明日香（2005）「字順の相反する二字漢語—『掠奪—奪掠』『現出—出現』について—」『雑誌「太陽」による確立期現代語の研究—「太陽コーパス」研究論文集—』博文館新社、pp.143-155

張巍（2010）『中古漢語同素逆序詞演變研究』上海古籍出版

【付記】

本稿は、「漢日対比語言学研究（協作）会」（中国北方工業大学、2017年8月19日）における口頭発表「日本語と中国語と字順の逆転する二字漢語—中国語のAB・BAと日本語に一方しかないもの—」の内容に加筆したものです。ご指導くださった指導教授の浅川哲也先生に御礼を申し上げます。また、匿名の査読者より多くの貴重なご指導を頂きました。ここに記して感謝の意を申し上げます。

（ま・ゆん 江西農業大学）